

千葉県内貝塚数から見た地名表

西 野 元

目 次

1. はじめに	525
2. 資料とその扱い	525
3. 貝塚数に現れた地名表の特性	529
4. 地名表間の収録率および被収録率	534
5. まとめ	537

1. はじめに

現在の遺跡地図は埋蔵文化財所在地の周知と保護を図る資料としての役割を負っているが、それとともに、遺跡についてさまざまな研究或いは調査を行おうとする時に最も基本的な資料である。

遺跡地図には地名表が付随し、この部分に名称、所在地、時期等多くの重要な情報が記載されている。位置を知るといふほかは、むしろ地名表の部分を利用することが多い。

地名表を利用する際に、いくつかの地名表を対照し検証して正確を期することは利用の常道であるが、地名表間の相異に迷ったことは多くの人が経験したところだろう。

なぜ違うのか、異なっている意味は何か、というのが課題の出発点である。

貝塚を取り上げたのは、目に着きやすい遺跡という特性から早く研究の対象として調査が進められ、研究資料としての地名表の整備も行われてきたからである。また、本県は全国的にも貝塚が多く、「千葉県には貝塚が幾つあるか」ということも話題となるからである。

本稿の目的は地名表において遺跡としての貝塚がどのように扱われてきたかを、遺跡(貝塚)数を通して検討することにより、地名表の性格や今後の在り方を考えようとするものである。貝塚の数を競うことや瑣末の数を云々することは本稿の目指す所ではない。

ところで、本稿では遺跡地図も含めて「地名表」と呼ぶが、その理由は、研究資料として地名表が遺跡地図に先立って早くから作成されてきたことと、冒頭に述べたように、現在の遺跡地図においても重要な内容は地名表部分に記載されていることとによる。

2. 資料とその扱い

(1) 資料の概要

本稿で資料として扱った地名表は次に示す12種類である。編著者、発行者等については文末の文献目録を参照されたい。番号は文献目録の番号、括弧内は略記である。以下本文、表中とも略記により表記する。

- | | | | |
|------|---|--------|-----------------------------|
| 2. | 『日本石器時代人民遺物発見地名表』 | (石地表Ⅰ) | 明治30(1897) |
| 3. | 『日本石器時代人民遺物発見地名表 第二版』 | (石地表Ⅱ) | 明治31(1898) |
| 4. | 『日本石器時代人民遺物発見地名表 第三版』 | (石地表Ⅲ) | 明治34(1901) |
| 5. | 『日本石器時代人民遺物発見地名表 第四版』 | (石地表Ⅳ) | 大正6(1917) |
| 6・7. | 『日本石器時代遺物発見地名表 第五版』『日
本石器時代遺物発見地名表増訂第五版』 | (石地表Ⅴ) | 昭和3(1928)
昭和3・5(1928・30) |

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1. | 『日本貝塚地名表』 | (日貝塚表) | 昭和34(1959) |
| 8. | 『千葉県石器時代遺跡地名表』 | (県石器表) | 昭和34(1959) |
| 18. | 『全国遺跡地図 千葉県』 | (文化庁図) | 昭和49(1974) |
| 13. | 『千葉県埋蔵文化財分布図』 | (県埋蔵図) | 昭和53(1978) |
| 19.- | 主として市町村教育委員会が作成した遺跡分 | | |
| 87. | 布地図等 ⁽¹⁾ | (市町村図) | 昭和49-63(1974-88) |
| 15. | 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』 | (県貝分布) | 昭和58(1983) |
| 9.-12. | 『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1)-(4) | (千分七図) | 昭和60-63(1985-88) |

これらの地名表は、作成の時期はもとより、作成の目的、作成者の性格、記載内容等がそれぞれ異なっている。『石地表Ⅰ-V』は、わが国における地名表の嚆矢とも言うべきもので、30年余にわたって4回の増補改定が行われている。基礎資料は主として『東京人類学雑誌』に拠っているが、『V』からは他の研究雑誌、報告書、地域誌が加わっているほか、『Ⅳ』からは、『君津郡誌』編纂に活躍した谷中国樹、小熊吉藏の報告が上総について見られる。『Ⅰ』に載せられた全国の遺跡数は1,834、『V』のそれは9,831に上る。『V』に挙げられている貝塚数は587である。⁽²⁾

『日貝塚表』と『県石器表』は個人の手になるもので、前者は、戦前から戦後の20余年にわたって酒詰が全国の貝塚について資料を集成した成果であり、国内では2,336の貝塚が収録されている。⁽³⁾ 後者は、地域の縄文時代遺跡を対象とした伊藤の稿本(文献8)を基礎にして作成され、遺跡総数721、貝塚は300が収録されている。

『文化庁図』は、文化財保護委員会が昭和35(1960)年度から昭和37(1962)年度にかけて全国的に実施した分布調査の成果に基づいて作成した『全国遺跡地図』(文献17、『文保委図』と略)の改定版である。両図とも作成の目的は、遺跡等の所在地の周知を図って、その保護に資することにあり、以後の県、市町村における分布地図作成の端緒をなしたものである。本来ならば『文保委図』について検討すべきであるが、同図は地図と所在地名一覧との対応が極めて不便なのと、所在地名一覧にも不備が見られるので『文化庁図』を取り上げた。

なお、『文保委図』の位置づけについては後述する。

『市町村図』の改定、作成が始まるのは昭和40年代後半からであるが、55年以降の作成が多い。県下80市町村のうち、本稿で扱ったのは63年までに刊行された66市町村で、旭、天津小湊、一宮、海上、浦安、大多喜、御宿、勝浦、九十九里、白子、長生、蓮沼、本笠および茂原の14市町村については、資料をまとめる段階では未作成か、または実見する機会を得なかった。

『県貝分布』は、全国的にも特色のある本県の貝塚に関する個別詳細な記録で、分布地図とは趣が異なる。なお、若干ではあるが収録されていない貝塚がある。

以上のほか、郡誌、自治体史等を始め今回は取り上げなかった資料も多いが、それらの中で著者・刊年不詳ながら第二次大戦中に作成された『千葉県通史第一編』（文献90）は、戦時下における千葉県の貝塚研究を窺える資料として注目される。⁽⁴⁾

(2) 資料の整理

上に述べた12種類82冊の地名表に収録されている遺跡から縄文時代の貝塚を抽出した。縄文時代の貝塚とした遺跡は、地名表の遺跡種別、時代に記載のある遺跡、縄文時代の貝塚であることがすでに明らかにされている遺跡、出土遺物の記載から判断し得る遺跡である。

各貝塚については、地名表の記載に基づいて表1に示した項目、内容に従って整理して一覧表を作成し、通し番号、市町村ごとの番号を付した。

表1 資料整理の項目と概要

項 目	摘 要
1 遺 跡 名 称	代表名称は、『千文セ図』、『市町村図』の呼称に従ったが、異称、別称のあるものはそれらも記載した。
2 遺 跡 所 在 地	知り得る場合は小字まで記載した。
3 時 期	早期から晩期まで5期区分によった。
4 形 状	概略ではあるが、馬蹄、点列、地点、斜面、洞穴等に区分した。
5 遺 存 状 況	存否について知り得る範囲で記載した。
6 地名表収録状況	『日貝塚表』以降は、それぞれの地名表が貝塚に付した遺跡番号を記載し、『石地表』については、収録の有無のみを記載した。

整理項目のうち、地名表収録状況に関しては、地名表の間で遺跡の対応を特定するのに困難な場合があった。『日貝塚表』442、『県石器表』45の松戸市大橋貝塚は、現在大橋地区内で知られている貝塚5箇所何れに該当するのか、『石地表 I-V』に見られる八日市場市飯塚貝塚貝塚は、同地区に所在する6箇所の貝塚の何れか等はその例である。

また、他の地名表には貝塚と記載されていないが、ある1件の地名表にのみ貝塚と記載されている例が幾つか見られた。今後の検討が必要であるが貝塚として抽出した。この事例は『文化庁図』に多く見られる傾向があった。そのほか、市川市丸山遺跡を貝塚と記載するような誤りと思われる例も見られた（『文化庁図』5-136）。

なお、近年の発掘調査等により新たに発見されたが、地名表に記載の無い貝塚は取り上げていない（文献88、89、91、92）。⁽⁵⁾

(3) 整理の結果

以上により作成した一覧表は60頁に及ぶものとなり、収録されている貝塚の総数は738に達した。ここでは地域・市町村別にそれぞれの地名表に収録されている貝塚数を表2に示す。

この表の貝塚総数は、地名表により名称が異なっても同一の貝塚である場合など地名表間の対応を検討して求めている。しかし、対応の検証が十分であったとは言えない。また、隣接す

表2 地名表別・地域別・市町村別貝塚数

地域	市町村名	貝塚 総数	1985	1983		1978	1973	1959	1959	1928	1917	1901	1898	1897
			千文セ図	県員分布	市町村図	県埋蔵図	文化庁図	県石器表	日貝塚表	石地表V	石地表IV	石地表III	石地表II	石地表I
東・東葛飾	松戸市	60	58	53	58	57	34	24	26	4	1)1	1)1	0	0
	市川市	70	55	54	55	43	39	26	25	7	7	7	7	7
	鎌ヶ谷市	27	15	9	15	1	8	4	4	1	1	1	1	1
	船橋市	38	25	23	25	23	23	22	13	4	4	4	4	4
東・千葉	八千代市	5	3	2	2	1	2	3	2	3	0	0	0	0
	習志野市	5	5	4	5	5	3	2	1	0	0	0	0	0
	千葉市	112	89	85	83	83	62	56	56	1)19	1)18	18	18	18
東	市原市	59	39	29	40	37	29	15	14	6	6	1	1	1
東・君津	袖ヶ浦市	10	10	2	10	3	4	4	2	1)1	1)1	0	0	0
	木更津市	19	9	10	5	4	19	6	3	3	3	0	0	0
	君津市	2	1	2	1	1	1	1	1	1)1	1)1	0	0	0
	富津市	7	6	6	6	4	5	2	2	3)4	2)3	0	0	0
東・安房	富山町	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	富浦町	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	三芳村	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
利・東葛飾	関宿町	23	15	16	15	13	12	16	18	2)7	2)7	1	1	1
	野田市	30	26	20	20	16	8	8	13	1)7	1)7	1)7	1)7	1)7
	流山市	23	15	16	15	9	9	10	3	5	5	5	4	3
	柏市	29	28	19	30	14	13	8	9	4	4	3	3	3
	我孫子市	12	12	6	12	8	5	5	5	3	3	3	2	1
	沼南町	14	8	10	8	9	11	4	4	4	4	4	4	0
利・印旛	印西町	8	8	2	8	5	4	0	1	0	0	0	0	0
	栄町	5	5	2	5	2	2	2	3	2	0	0	0	0
	本埜村	1	1	0	—	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	印旛村	4	4	4	1	4	4	3	3	3	2	1	0	0
	佐倉市	11	9	9	9	5	8	8	7	1	1	0	0	0
	四街道市	11	5	5	5	4	7	2	1	0	0	0	0	0
	成田市	12	12	11	9	7	7	4	3	1	1	0	0	0
	富里町	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
利・香取	下総町	2	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
	神崎町	5	4	4	4	4	4	4	6	0	0	0	0	0
	大栄町	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
	佐原市	20	12	13	11	10	14	6	3	1	1	1)1	0	0
	小見川町	12	13	7	12	9	9	9	8	4	4	4	4	4
	山田町	3	2	2	2	2	2	2	3	1	1	0	0	0
	東庄町	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
太	多古町	9	8	4	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0
太海上	銚子市	8	5	3	6	2	2	3	3	2	2	1)1	1)1	1)1
	旭市	2	2	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0
太匝達	八日市場市	19	17	12	15	16	5	5	6	4	4	4	4	4
	光町	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
太・山武	芝山町	2	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	横芝町	9	9	5	8	8	5	5	2	0	0	0	0	0
	松尾町	2	1	1	1	2	2	2	0	0	0	0	0	0
	成東町	3	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

太・山武	山武町	2	2	2	2	1	2	2	0	0	0	0	0	
	東金市	7	6	3	2	4	5	4	1	1	1	1	1	
	大網白里町	5	4	2	4	2	3	4	1	1	1	1	1	
太・長生	長柄町	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	茂原市	3	2	2	—	3	3	3	2	1	1	1	1	
	長生村	2	1	1	—	1	0	0	0	0	0	0	0	
	一宮町	1	1	1	—	1	1	1	1	1	1	1	0	
太・夷隅	大原町	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	
	勝浦市	1	1	0	—	1	1	1	1	1	0	0	0	
太・安房	天津小湊町	4	4	3	—	2	2	3	2	0	0	0	0	
	鴨川市	1	1	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	
	千倉町	1	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	
	白浜町	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	
	館山市	7	8	5	8	8	6	5	3	1	1	1	1	
計	60市町村	738	582	478	534	445	392	300	268	112 10)	99 10)	72 4)	66 2)	60 2)

1. 地域欄のうち、東は東京湾沿岸、利は利根川流域沿岸、太は太平洋沿岸の略。以下は各郡域名。
2.)を付した数字は、地名表に収録されているが貝塚としては記載されていない遺跡数で内数。

る貝塚を1貝塚としている場合と2貝塚としている場合(前者の例としては千葉市加曽利貝塚、後者の例としては船橋市高根木戸・同北貝塚)には、各地名表の記載に従って数えるなど、さらに検討すべき課題を含んでいる。この数字が直ちに実在する、或いはした貝塚の数を示すものではなく、地名表に現れた数であり、今後検討を加える中で変わり得るものである。

なお、地域のうち、東京湾・利根川・太平洋沿岸とした区分については、水系や立地の検討に基づいたものではなく、行政区画単位で極めて便宜的に行ったものである。

3. 貝塚数に現れた地名表の特性

(1) 作成時期から見た地名表の性格

表2を郡域の単位で地区別に整理したのが表3である。県内の貝塚は『石地表Ⅰ』の60箇所から『千文セ図』の582箇所まで、88年間に9.7倍に増加している。これを年平均増加率で見ると2.6%となるが、増加の推移は時期により、地区によりかなりの差が認められる。

主要地名表について貝塚数の増加推移を全県および主要地区別に示したのが図1である。この図に見る全県の貝塚数から、その推移を地名表の作成時期により3期に区分し得る。

第1期は、『石地表Ⅰ』から『石地表Ⅴ』までで、貝塚数は緩やかに増加し、31年間に1.9倍、年平均増加率は2.1%を示す。明治以降第二次大戦までの大学、学会を中心とした研究の段階を現した時期と言える。

第2期は『石地表Ⅴ』以後『文化庁図』までの時期で、貝塚数の急激な増加を見る。46年間

表3 地名表別・地区別貝塚数

地名表 地区名 貝塚総数	地名表 貝塚数		地区別										
	1985	1983	千文七図	貝員分布	市町村図	県埋蔵図	文化庁図	県石器表	日貝塚表	石地表V	石地表IV	石地表III	石地表II
全 県	738	582	478	534	445	392	300	268	112	99	72	66	60
千 葉	122	97	91	90	89	67	61	59	22	18	18	18	18
東 葛 飾	326	257	226	253	193	162	127	120	46	43	36	33	27
東京湾岸	195	153	139	153	124	104	76	68	16	13	13	12	12
利根流域	131	104	87	100	69	58	51	52	30	30	23	21	15
印 旛	53	44	33	37	28	33	20	19	8	4	1	0	0
香 取	53	42	33	35	28	30	22	22	7	7	5	4	4
利根流域	44	34	29	32	28	30	22	22	7	7	5	4	4
太平洋岸	9	8	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海 上	10	7	3	6	2	2	3	3	2	2	1	1	1
匝 瑳	21	19	12	17	16	5	5	6	4	4	4	4	4
山 武	30	27	15	19	19	18	17	4	2	2	2	2	2
長 生	7	4	4	1	5	4	4	3	2	2	2	1	1
夷 隅	2	2	0	1	2	1	1	1	1	0	0	0	0
安 房	17	18	12	13	14	12	12	9	3	3	2	2	2
太平洋岸	14	15	9	10	11	9	10	7	3	3	2	2	2
東京湾岸	3	3	3	3	3	3	2	2	0	0	0	0	0
君 津	38	26	20	22	12	29	13	8	9	8	0	0	0
市 原	59	39	29	40	37	29	15	14	6	6	1	1	1

に3.5倍、年平均増加率は2.8%である。

第2期の初頭は第二次大戦による空白期があるものの、戦後の前半期は『県石器表』や同年の『日貝塚表』に見られるように、戦後における考古学・地域史研究の成果が現れた段階であり、後半期は開発が急激に進展する中で遺跡保護を目的に『文保委図』の作成が始められ、『文化庁図』に至る時期である。

地名表作成の目的の違いについては、前半期の『日貝塚表』序文と、後半期の『文保委図』序文とによく現れていると言えよう。

その中で、『県石器表』の序が、「本県の遺跡とその文化を知る上に貴重な資料を得て」と述べるとともに、「……近年京葉工業地帯の造成によって、めまぐるしい開発が進められ、考古資料であるこれら遺跡、遺物は、ともすれば建設を急ぐの余り、また認識不足によって破壊、散失等の犠牲になるとか……」の現状の中で、「開発に平行した考古資料の保護」のための活用促進を訴えているところに後半期の萌芽を見ることができる。

地名表の形態も大きく変化した。前半期以前は『石地表I』以来地名表だけが作成されてきたが、後半期以降は遺跡地図に付随した地名表となっている。言うまでもなく、遺跡保護のために所在位置の周知を図ることに主眼が置かれた結果であるが、地図の利用が容易になったこ

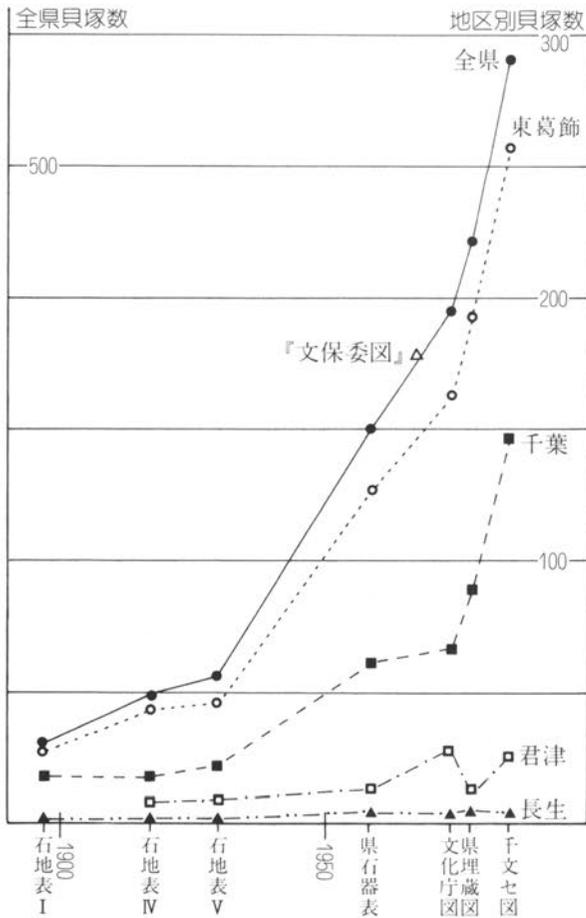


図1 地名表に現れた千葉県内貝塚数の推移

られている貝塚は対応の検討が不十分ながらも355箇所を数える。図1には参考として刊行年次の1967年にこの数字の位置を示してある。

図1を見る限り、『石地表V』と『文化庁図』を結ぶ直線上に位置し、特に変化は認められない。しかし、『文保委図』の基礎となった分布調査が行われたのは、『県石器表』が作成された3年後の昭和37(1962)年であることを考慮すると見方が変わってくる。⁽⁶⁾ 即ち、3年間に貝塚数は1.2倍、年平均増加率では5.8%となり、どの時期よりも高い値を示す。この後に続く『文化庁図』との間では9年間に1.2倍、2.0%でしかない(表4参照)。

このように見ると、『文保委図』の作成は大きな転機であり、以後における地名表作成の本格化の端緒を開いたと評価できる。惜しむらくは、地図の縮尺、遺跡位置の表示、地名一覧との対応などに使い難さがあるとともに、刊行までに年月を費やし速やかな周知が図れなかったこと等に問題があったが、こうした問題があったればこそ、その解決に向けて多くの検討や試み

とも見逃せない背景である。

また、最も大きな変化は、地名表に収録される遺跡の内容に見られる。前半期までの地名表は「石器時代」、「貝塚」、「古墳」など特定の時代、特定種別の遺跡に限定して作成されてきたのに対し、『文保委図』以後は全時代(期)、全種別の遺跡を対象とした「一般地名表」とも呼ぶべきものとなり、以後の地名表の基本となる。

このように第2期は、図の上では貝塚数が直線的に増加しているように見えるものの、その前半期と後半期との間で地名表の性格が大きく変化した時期である。

第2期を前半と後半とに区分するに当たり触れておかねばならないのは、前述した理由で本稿の資料としては扱わなかった『文保委図』の位置づけである。『文保委図』に収録さ

が重ねられる起爆剤となり得たと言えよう。

第3期は『文化庁図』の後『千文セ図』に至る時期で、貝塚数はさらに急激な増加を見せて11年間に1.5倍に、年平均増加率は3.7%と3期の中では最高となる。市町村単位の詳細な調査が進み、その成果が一般地名表としての『市町村図』に、さらに県域を対象とした『県埋蔵図』、『千文セ図』にまとめられる時期である。

この時期の地名表は、すべて遺跡地図の形態となり、作成者は県・市町村教育委員会および県文化財センターであるが、特に、『市町村図』の作成が大きく進展する。作成の目的は、「実態の把握と詳細な基礎資料作成を」目的とした『県貝分布』を別とすれば、何れも第2期後半に引き続いて「埋蔵文化財包蔵地の周知徹底」が主眼となっている。

内容的には、遺跡種別、時代(期)、遺物等に関する記載が詳細となり、より大縮尺の地図が使用されるようになる。⁽⁷⁾

貝塚数の増加は分布調査の詳細化に伴う結果であったが、それ以上に著しい増加を見せたのは貝塚以外の諸種の遺跡、特に、散布地の数である。表4にこの時期の遺跡数増加状況を示すが、貝塚は早くから関心が持たれ、地名表も作成されてきただけに、他種の遺跡に比べて新たに発見される余地が少なく、一方、これまで地名表に収録されることが少なく、開発の中で周知・保護が急がれるようになった散布地に主力が注がれた事情が現れている。⁽⁸⁾

表4 『文保委図』以降の遺跡数増加状況

区分 項目		刊行年次	1985	1978	1974	1967
		地名表	千文セ図	県埋蔵図	文化庁図	文保委図
		調査年度	1984	1976	1971	1962
		経過年数	8	5	9	—
全遺跡	総数		23,152	11,940	3,369	2,720
	増加数		11,212	8,571	649	—
	増加倍数		1.9	3.5	1.2	—
	年増加率(%)		8.6	28.8	2.0	—
貝塚	総数		582	445	392	355
	増加数		137	53	37	—
	増加倍数		1.3	1.1	1.1	—
	年増加率(%)		3.4	2.7	1.1	—
散布地	総数		8,534	3,491	1,261	944
	増加数		5,043	2,230	317	—
	増加倍数		2.4	2.8	1.3	—
	年増加率(%)		11.8	22.6	3.3	—

散布地は地名表の遺跡種別に包含地、集落跡とあるものを含む。

(2) 地名表の地域性

表3の中で最も新しい成果である『千文セ図』の貝塚数を、東京湾沿岸、利根川流域沿岸および太平洋沿岸の3地域に分けると、318(55%)、182(31%)、82(14%)となる。地名表により貝

塚数が異なるので各地域の比率について見ると、『石地表Ⅰ』の51、32、17は『石地表Ⅴ』で47、40、13となり、利根川流域沿岸の比重を増している。『県石器表』は56、31、13、『日貝塚表』は56、35、9と『千文セ図』に近い値を示す。『県埋蔵図』、『文化庁図』は東京湾沿岸の比率が高く、前者では60、28、12となっている。

このような貝塚数の地域比の差は、第2期前半以前では地名表作成者の関心、知名度の高い貝塚の多少、交通の利便などに起因したろうし、第2期後半以降は地名表作成の体制に因る所が大きかったと思われる。

図1には全県の貝塚数推移とともに、推移に特色の見られる代表的な地区(郡域)について掲げてある。東葛飾地区は、全期を通じて急激な増加を示す。この地区には県内貝塚の45%が所在するので、全県の推移に大きく影響し、両者はほぼ同一の推移を辿っている。

東葛飾地区の推移は、この地区が貝塚の多いことで早くから注目されてきたことと、都市部が多く、その周辺で大規模開発が早く始まったことへの対応によったことを示すものである。

千葉地区は第1期には増加がほとんど見られず、第2期に緩やかな増加を見せた後第3期に急激に増加する。同様な推移を示すのは市原地区である。両地区とも第2期後半から第3期に入って開発が進む状況を反映していると言えよう。

君津地区は、第2期までに増加してきた貝塚数が第3期に入ると減少し、その後再び増加に転じるという特異な推移を示し、同様な推移は、印旛・香取地区にも見られる。これら3地区の特異な現象についてはこの後で述べる。

長生地区は他の太平洋沿岸域の地区とともに、県内では貝塚の少ない地区である。全期を通じて貝塚数の増加が極めて僅かな例として示した。夷隅地区も同様な推移を見せる。

匝瑳・海上地区も第2期までは似た推移を示すが、第3期に増加が目立つ。山武・安房地区は第2期に緩やかな増加を見た後第3期に急増する。貝塚の絶対数は少ないが、千葉・市原地区に似た推移を見せている。

君津以下3地区に見られる特異な推移について触れておく。表2から、君津地区では木更津市の貝塚数が『文化庁図』19から『県埋蔵図』では4に減少し、その後『千文セ図』で9に増加している状況を見ることができる。同市の貝塚を2-(3)で述べた個別貝塚の一覧表によって検証すると、減少した15の内訳は不収録11、散布地3、重複1である。不収録11のうち貝塚2、散布地4は『千文セ図』に収録され、他の5は所在不明4、重複1である。

同様な手続きで他の2地区について検討すると、印旛地区は、佐倉市において8から5、その後9へ、四街道市においては7から4、その後5へと推移する。香取地区は佐原市で14から10へ、その後12となる。減少した貝塚を以後の地名表で見ると、佐倉市では散布地3、四街道市では散布地5、所在不明1(新発見4があり最終的に5となる)、佐原市では貝塚1、散布地2、所在不明1とな

る。

以上の状況から、3地区に見られた特異な推移は『文化庁図』の誤りと、君津地区は『県埋蔵図』にも誤りがあったことによると判断し得る。

なお、地区単位では全体の増加数の中に埋没して目立たない場合でも、個別市町村については表2の貝塚数推移中に同様な例を幾つか見出すことができるが、個別の検証は略する。

貝塚の地域的分布および地区別の貝塚数推移から地域的特性いくつかについて述べたが、これらの特性は地域における地形等の自然条件、貝塚の知名度、開発状況、地名表作成体制等多くの要素が複合した結果生じたものである。

4. 地名表間の収録率および被収録率

地名表を作成するに当たっては、現地踏査を行うほか、初めて作成する場合を除いて、それまでに作成された先行地名表の成果について検証することが基本的な作業である。⁹⁾

先行地名表の内容に誤りがなく、後出地名表が先行地名表を確実に検証し、かつ、後出地名表の内容にも誤りがないことを前提とすれば、後出地名表は先行地名表に収録された遺跡の全てを収録し、その遺跡総数は、新発見があれば増加し、無ければ変わらないはずである。

先行地名表に誤りがあり、後出地名表に誤りがないとすれば、後出地名表に収録される先行地名表中の遺跡は、誤りの分は減少し、遺跡総数は新発見分が増加、誤り分が減少となる。

先行地名表が正しく、後出地名表に誤りがある場合は、両者の対比は一律ではない。後出地名表が先行地名表中の遺跡を収録した上で新発見遺跡について誤っている場合は、収録数は変わらず、遺跡総数の増加として現れ、先行地名表中の遺跡を収録しなかった場合は収録数の減少、遺跡総数は収録しなかった分が減少し、新発見遺跡数と相殺される。

一般に新しく作成される地名表の方がより詳細となり遺跡数が増加するので、地名表相互間の遺跡数、収録数を比較すれば、地名表に潜む問題点を摘出し得る可能性がある。

この視点から作成したのが表5である。各地区および全県域について作成したが、貝塚数が多く増加も著しい東葛飾と、地名表の誤りから貝塚数推移が特異であった君津との2地区、それに全県域について掲げてある。

この表の左欄地名表に対応する横欄は、左欄地名表が先行地名表の成果を収録している状況を示すもので、貝塚数、収録率で現してある。先行地名表に対する依拠の程度を示すものと言える。

東葛飾地区は貝塚が多く早くから注目されてきただけに、各地名表とも平均収録率は高いが、『文化庁図』の低いのが目立つ。

君津地区の『文化庁図』は誤りがあったにもかかわらず、平均収録率が高い。このことは、誤りの殆どが新発見として収録された貝塚に見られるということで、同様な推移をとる他地区、市町村の誤りについても同じ指摘ができる。先行地名表により検証する術の無い遺跡に誤りが多いことは、遺跡の認定の重要さとともに先行地名表を検証する重要性を示すものである。

2-(1)で述べた資料の性格から、『市町村図』、『県貝分布』を除いて全県域の平均収録率を見ると、『文化庁図』、『県埋蔵図』が低く、その後の地名表の平均収録率が高いので、この二者は先行地名表の検証に問題があったと考えられる。

なお、第1期地名表の平均収録率が高いのは、先行地名表に追加して行く作成法と、この時期に知られていた貝塚は知名度の高いものが多く、その後見落とされることが少なかったことによると考えられる。

各地名表の地区別平均収録率は表6の通りである。

表5-a 地名表別収録貝塚数及び収録率—東葛飾地区—(327)箇所

刊行年次 地名表名 収録貝塚数	1985	1983		1978	1974	1959	1959	1928	1917	1901	1898	1897	平均 収録率
	千文七図	県貝分布	市町村図	県埋蔵図	文化庁図	県石器表	日貝塚表	石地表V	石地表IV	石地表III	石地表II	石地表I	
257	257	226	253	193	162	127	120	46	43	36	33	27	
1985 千文七図	257	197 86.7	245 96.8	184 95.3	146 90.1	105 82.7	104 86.7	41 89.1	39 90.7	34 94.4	31 93.9	26 96.3	91.0
1983 県貝分布	226		198 73.8	169 87.6	137 84.6	101 79.5	97 80.0	40 87.0	38 88.4	33 91.7	31 93.9	25 92.6	83.6
市町村図	253			185 95.9	137 84.6	105 82.7	102 85.0	41 89.1	39 90.7	34 94.4	31 93.9	26 96.3	88.9
1978 県埋蔵図	193				132 81.5	100 78.7	97 80.8	37 80.4	35 81.4	30 83.3	28 84.8	23 85.2	81.1
1974 文化庁図	162					89 70.1	85 70.8	35 76.1	33 76.7	29 80.6	27 81.8	23 85.2	74.3
1959 県石器表	127						97 80.8	42 91.3	39 90.7	34 94.4	31 93.9	25 92.6	87.9
1959 日貝塚表	120							44 95.0	42 97.7	36 100	33 100	27 100	98.4
1928 石地表V	46								43 100	35 97.2	32 97.0	26 96.3	97.8
1917 石地表IV	43									35 97.2	32 97.0	26 96.3	96.9
1901 石地表III	36										33 100	27 100	100.0
1898 石地表II	33											27 100	100.0
1897 石地表I	27												
平均被収録率		86.7	85.3	92.9	85.2	78.7	80.8	87.0	89.5	92.6	93.6	94.6	

- 以下表5-cまで各欄上段は、上欄地名表中の貝塚のうち左欄地名表に収録されている数。
- 同下段は、上欄収録貝塚総数に対する収録率。
- 平均収録率は以下の式により求めた。
左欄地名表の横欄上段に記載された収録貝塚数の総和/対応する上欄地名表の収録貝塚数の総和。
- 平均被収録率は上欄地名表の縦欄下段に記載された収録率の平均。

表 5-b 地名表別収録貝塚数及び収録率－君津地区－ (38)個所

刊行年次 地名表名 収録貝塚数	1985	1983		1978	1974	1959	1959	1928	1917	平均 収録率
	千文七区	県貝分布	市町村区	県埋蔵区	文化庁区	県石器表	日貝塚表	石地表V	石地表IV	
	26	20	22	12	29	13	8	9	8	
1985 千文七区	26	16 80.0	22 100	12 100	16 55.2	12 92.3	8 100	9 100	8 100	85.1
1983 県貝分布	20		13 59.1	11 91.7	16 55.2	11 84.6	7 87.5	9 100	8 100	74.3
市町村区	22			12 100	14 48.3	10 76.9	6 75.0	7 87.5	6 75.0	69.6
1978 県埋蔵区	12				10 34.5	8 61.5	6 75.0	6 66.7	5 62.5	52.2
1974 文化庁区	29					13 100	7 87.5	8 88.9	7 87.5	92.1
1959 県石器表	13						7 87.5	7 77.8	7 87.5	84.0
1959 日貝塚表	8							6 66.7	6 75.0	70.6
1928 石地表V	9								8 100	100.0
1917 石地表IV	8									
平均被収録率		80.0	79.6	97.2	48.3	83.1	85.4	83.9	85.9	

〔石地表III〕以前は収録貝塚数0のため省略。

表 5-c 地名表別収録貝塚数及び収録率－全県域－ (738)個所

刊行年次 地名表名 収録貝塚数	1985	1983		1978	1974	1959	1959	1928	1917	1901	1898	1897	平均 収録率
	千文七区	県貝分布	市町村区	県埋蔵区	文化庁区	県石器表	日貝塚表	石地表V	石地表IV	石地表III	石地表II	石地表I	
	582	478	534	445	392	300	268	112	99	72	66	60	
1985 千文七区	582	426 89.1	509 95.3	414 93.0	334 85.2	253 84.3	225 84.0	94 83.9	87 87.9	66 91.7	61 92.4	56 93.3	89.3
1983 県貝分布	478		408 76.4	368 82.7	306 78.1	241 80.3	208 77.6	89 79.5	82 82.8	61 84.7	57 86.4	51 85.0	79.7
市町村区	534			397 89.2	302 77.0	235 78.3	210 78.3	87 77.7	81 80.0	62 86.1	59 89.4	54 90.0	82.0
1978 県埋蔵区	446				313 79.8	236 78.7	208 77.6	86 76.8	79 79.8	61 84.7	57 86.4	52 86.7	79.8
1974 文化庁区	392					223 74.3	196 73.1	85 75.9	77 77.8	58 80.6	53 80.3	49 81.7	75.8
1959 県石器表	300						219 81.7	99 88.4	88 88.9	67 93.1	62 93.9	56 93.3	87.3
1959 日貝塚表	268							103 92.0	93 93.9	70 97.2	65 98.5	59 98.3	95.4
1928 石地表V	112								97 98.0	70 97.2	65 98.5	59 98.3	98.0
1917 石地表IV	99									70 97.2	65 98.5	59 98.3	98.0
1901 石地表III	72										66 100	60 100	100.0
1898 石地表II	66											60 100	100.0
1897 石地表I	60												
平均被収録率		89.1	85.9	88.3	80.0	79.2	78.7	82.0	86.1	90.3	92.4	93.2	

表6 地区別・地名表別平均収録率

地区 年次 地名表	地区													
	全 県	千 葉	東 葛	印 旛	香 取	海 上	匝 瑳	山 武	長 生	夷 隅	安 房	君 津	市 原	
1985 千文七図	89.3	90.6	91.0	92.3	88.4	69.2	90.1	88.2	72.4	100	98.8	85.1	76.0	
1983 県貝分布	79.7	85.9	83.6	79.3	84.8	60.9	62.3	55.2	87.5	0	61.1	74.3	69.3	
市町村図	82.0	86.2	88.9	75.2	84.5	64.7	78.8	51.5	—	16.7	84.7	69.6	73.6	
1978 県埋蔵図	79.8	84.3	81.1	72.9	82.2	53.3	80.6	77.6	100	100	80.0	52.2	80.8	
1974 文化庁図	75.8	77.6	74.3	88.5	81.7	61.5	48.4	90.3	100	100	72.7	92.1	72.7	
1959 県石器表	87.3	86.3	87.9	93.8	73.5	90.0	92.3	100	100	100	100	84.0	79.3	
1959 日貝塚表	95.4	93.6	98.4	100	81.5	100	100	100	100	100	100	70.6	100	
1930 石地表V	98.0	100	97.8	100	85.0	100	100	100	100	—	100	100	100	
1917 石地表IV	98.0	100	96.9	100	92.3	100	100	100	100	—	100	—	100	
1901 石地表III	100	100	100	—	100	100	100	100	100	—	100	—	100	
1898 石地表II	100	100	100	—	100	100	100	100	100	—	100	—	100	
全地名表平均	84.4	87.5	87.0	83.6	84.6	70.5	80.3	74.3	84.4	60.0	83.3	75.4	75.6	

上欄地名表に対応する縦欄は、上欄地名表の成果が後出地名表に収録されている状況を示すもので、平均被収録率は平均収録率と表裏の関係をなしている。後出地名表の先行地名表に対する評価とも言える。

君津地区の『文化庁図』の低さは、すでに述べた同図の誤りを示している。全県域および東葛飾地区に見られる『県石器表』、『日貝塚表』の低さは、この二地名表に収録されている貝塚名の後出地名表との対応の難しさに影響されているところがあり、今後の検討を必要とする。

5. まとめ

本稿においては、12種類の地名表について縄文時代貝塚の収録状況を検討した。その結果の概略は次の通りである。

地名表に収録されている貝塚数の推移から、地名表を作成時期により3期（小期を含めて4期）に区分し、地名表に見られる傾向から地名表の性格の時期ごとの変化を指摘した。

地域ごとの貝塚分布から地名表内容の地域差を示すとともに、地区別貝塚数の推移から地名表に含まれる誤りを摘出した。

各地名表間の関係を、先行地名表に対する収録率、後出地名表に見る被収録率の視点を提示して整理し、先行地名表を検証する重要性を指摘した。

以上の結果は、地名表に関する極めて常識的なことにしか過ぎないだろうが、これらに基づいて若干の提言をして結びとする。

第一は、遺跡名称について、先行地名表に別称がある場合は明記をすることである。これは先行地名表を検証し、地名表間の遺跡の対応を求める際に最も重要なことである。遺跡名称の

混乱から遺跡が別になってしまったり、遺跡数が変わる等遺跡認識の混乱が起きることは、まま見受けられる所で、本稿の資料作成においても問題の多かった点であった。

第二は、先行地名表を検証した結果、内容等が変更された場合は、その成果と根拠を示すことである。遺跡種別や時代、時期の相異は地名表間でしばしば目にするが、いずれが正しいかを判断する根拠は明らかでない例が多い。利用者が判断を迷わせないことが重要である。

以下は、本稿に直接関係ないが、筆者が地名表について望んでいることの中から二つを挙げる。その一は、遺跡の時代・時期区分の明確化である。縄文時代については土器型式名が記載されている例が多いが、その他の時代については極めて曖昧な場合が多い。時期の明確化の困難さは筆者自身も地名表作成に当たって経験しているが、時代が新しくなるほど区分が大まかになるようでは、地名表が歴史資料となるのに程遠いと感じている。

その二は、大規模開発で地形が大きく変わった地域の地図表記である。かつての地形を窺うことも困難な現況の地形図上にすでに消滅した遺跡を表示してある例を多く見受ける。かつてここに遺跡が存在したことを市民に周知し、地域の歴史理解を深める意味はあるだろう。だが、さらに一步を進めて、現況図の上に旧地形図を重ねて遺跡の位置を示したらば、遺跡立地をはじめ、相互関係等より多くの情報が得られるであろう。

この二つは、遺跡立地や、地域史を考えようとする時いつも抱く思いである。

本稿を草するに当たっては、資料の閲覧をはじめ、個別貝塚に関して県内市町村教育委員会職員の方々から御教示を頂いたことが多い。御厚情に御礼申し上げるとともに、御芳名を記し得ない失礼をお許し願う次第である。

註

- (1) 市町村教育委員会以外に個人、研究団体等による調査成果が含まれる。
- (2) 樺太、朝鮮及び台湾に所在する貝塚29を除いた数。
- (3) 通番号で国内番号の付されている貝塚数。
- (4) 同書の本文、文献註が人名、著者名に敬称を付している中で、50頁註18の高木卯之助のみ敬称を付していないことから或いは高木の著かと考えられる。刊年について酒詰は昭和18として?を付しているが根拠は不明(文献1, 68頁 飯笹貝塚主要文献)。50頁註19に昭和15年3月16日の新聞記事を挙げているので、それ以後ではある。
第1章末の「房総地方石器時代遺跡地名表」は『石地表V』を基礎としながらも、新たに39遺跡を追加し、その内貝塚は15である。
- (5) 文献としては代表的例に止めた。現在調査中の羽戸遺跡(東金市小野)においても発見されているとの教示を本多昭宏氏から戴いた。
- (6) 分布調査による千葉県の遺跡総数は11,411とされているが(文献92, 140頁)、『文保委図』には欠番、重複を

除いて2,717の遺跡しか収録されていない。その差の検討は措くとしても、短期間に遺跡数が激増した動向は十分に窺える。

- (7) 『市町村図』の殆どは1/10,000図を使用しているが、1/5,000図、1/2,500図を用いている例もある。
- (8) 古墳、横穴の増加も著しく、これまで群として扱われてきたものも個々に記載されるようになるほか、収録される種別も増えるが、大規模遺跡の多い散布地を例として取上げた。
- (9) 地名表以外に調査報告書、自治体史、論文等の成果について検証すべきことは言を俟たない。この点では、初めての地名表においても先行成果の検証は必須である。

文献目録

著者、発行者が同一の場合は発行者名を省略した。

配列は、I・II・IVは編著者名の五十音順、IIIのみ表2の地域・市町村順に従い、同一編著者の場合は刊行年次順とし、全体に通し番号を付した。

I 全国を対象とした資料

1. 酒 詰 仲 男 1959 『日本貝塚地名表』 土曜会
2. 東京帝国大学<田中正太郎・林 若吉> 1897 『日本石器時代人民遺物発見地名表〔第1版〕』
3. —————<野中 完 1898 『日本石器時代人民遺物発見地名表〔増訂第2版〕』
—>
4. —————<野中 完 1901 『日本石器時代人民遺物発見地名表〔増訂第3版〕』
—>
5. —————<柴田 常 1917 『日本石器時代人民遺物発見地名表〔増訂第4版〕』
惠>
6. —————<八幡 一 1928 『日本石器時代遺物発見地名表〔増訂第5版〕』 岡書院
郎・中谷治宇二郎>
7. ————— 1930 『日本石器時代遺物発見地名表〔増訂第5版追補1〕』 岡書院

II 県域を対象とした資料

8. 伊 藤 和 夫 1955 『千葉県縄文遺跡地名表』 (謄写)
9. 財団法人千葉県文化財センター 1985 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地区―』
10. ————— 1986 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区―』
11. ————— 1987 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)―市原・君津・長生地区―』
12. ————— 1988 『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)―安房・夷隅地区―』
13. 千葉県企画部企画課 1978 『千葉県埋蔵文化財分布図 附 保安林現況図』 [千葉県広報協会]

千葉県内貝塚数から見た地名表

- | | | |
|-----------------------|------|---|
| 14. 千葉県教育委員会 | 1971 | 『千葉県記念物所在地図－史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図－』 |
| 15. 千葉県教育庁文化課 | 1983 | 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』 千葉県教育委員会 |
| 16. 平野 元三郎・伊藤和夫・金子 浩昌 | 1959 | 『千葉県石器時代遺跡地名表－県下の石器時代遺跡の分布とその文化』 千葉県教育委員会 |
| 17. 文化財保護委員会 | 1967 | 『全国遺跡地図（千葉県）』 |
| 18. 文化庁文化財保護部 | 1974 | 『全国遺跡地図 千葉県』 |

III 市町村域を対象とした資料

- | | | |
|---------------------------------|------|--|
| 19. 松戸市教育委員会 | 1976 | 『松戸市の遺跡－松戸市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』 |
| 20. 明治大学考古学研究所
MICROLITH 編集局 | 1968 | 『MICROLITH』第22号<松戸市内縄文時代遺跡分布調査> 明治大学考古学研究所 |
| 21. 市川市教育委員会 | 1980 | 『千葉県市川市埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図』 |
| 22. 明治大学考古学研究所
MICROLITH 編集局 | 1969 | 『MICROLITH』第23号<市川市内縄文時代遺跡分布調査> 明治大学考古学研究所 |
| 23. 鎌ヶ谷市教育委員会 | 1983 | 『千葉県鎌ヶ谷市埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 24. 船橋市教育委員会 | 1983 | 『船橋市の遺跡－埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』 |
| 25. 八千代市教育委員会 | 1983 | 『八千代の遺跡－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』 |
| 26. 習志野市教育委員会 | 1983 | 『千葉県習志野市埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 27. 千葉市教育委員会 | 1984 | 『千葉市埋蔵文化財分布地図 <改訂版>・ 附篇』 |
| 28. 市原市教育委員会 | 1987 | 『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－南部編』 |
| 29. ————— | 1988 | 『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編』 |
| 30. 袖ヶ浦町教育委員会
(現在袖ヶ浦市) | 1985 | 『袖ヶ浦町文化財分布調査報告書昭和59年度改訂版－埋蔵文化財－』 |
| 31. 木更津市教育委員会 | 1985 | 『埋蔵文化財保護の手引』 |
| 32. 君津市教育委員会 | 1986 | 『千葉県君津市埋蔵文化財分布地図』 |
| 33. 富津市教育委員会 | 1987 | 『千葉県富津市埋蔵文化財分布地図』 |
| 34. 鋸南町教育委員会 | 1982 | 『鋸南町の遺跡－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 35. 富山町教育委員会 | 1988 | 『千葉県安房郡富山町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 36. 富浦町教育委員会 | 1988 | 『千葉県安房郡富浦町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 37. 三芳村教育委員会 | 1988 | 『千葉県安房郡三芳村埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |

38. 関宿町教育委員会 1982 『関宿町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
39. 流山市教育委員会 1981 『流山の遺跡—流山市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—』
40. 野田市教育委員会 1980 『野田市の遺跡—野田市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—』
41. 柏市教育委員会 1983 『柏の遺跡—柏市埋蔵文化財分布地図—』
42. 我孫子市教育委員会 1981 『我孫子の遺跡—千葉県我孫子市埋蔵文化財包蔵地所在報告』
43. 沼南町教育委員会 1981 『千葉県沼南町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
44. 森 耕 一 1979 『千葉県印旛郡白井町埋蔵文化財分布地図』 白井町教育委員会
45. 印西町教育委員会 1983 『千葉県印旛郡印西町埋蔵文化財分布地図』
46. 栄町教育委員会 1984 『千葉県印旛郡栄町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
47. 印旛村埋蔵文化財分布 1980 『印旛村の古代文化—遺跡の分布と採取資料の紹介』印旛村教育委員会
調査団<三浦和信他>
48. 佐倉市教育委員会 1984 『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図—佐倉市遺跡詳細分布調査報告書—』
49. 四街道市教育委員会 1982 『千葉県四街道市埋蔵文化財分布地図』
50. 成田市埋蔵文化財分布 1974 『成田市文化財分布調査報告書—埋蔵文化財編—』 成田市教育委員会
調査団
51. 富里村教育委員会 1981 『千葉県富里村埋蔵文化財分布地図』
52. 酒々井町教育委員会 1984 『酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
53. 八街町教育委員会 1980 『千葉県印旛郡八街町埋蔵文化財分布地図』
54. 下総町教育委員会 1987 『下総町の遺跡と文化財』
55. 神崎町教育委員会 1984 『千葉県神崎町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
56. 石橋 宏 克 1985 『千葉県香取郡大栄町遺跡分布調査報告書』 大栄町教育委員会
57. 佐原市教育委員会 1979 『千葉県佐原市埋蔵文化財分布地図—史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
58. 小見川町教育委員会 1985 『千葉県小見川町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
59. 栗源町文化財審議会 1979 『千葉県栗源町埋蔵文化財分布地図(香取郡栗源町)』栗源町教育委員会
60. 山田町教育委員会 1984 山田町の遺跡—千葉県山田町埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
61. 干潟町教育委員会 1985 『千葉県干潟町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』
62. 東庄町教育委員会 1985 『千葉県香取郡東庄町埋蔵文化財分布地図—史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図—』

千葉県内貝塚数から見た地名表

- | | | |
|---------------------------|------|--|
| 63. 多古町教育委員会 | 1981 | 『千葉県多古町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 64. 銚子市埋蔵文化財分布
地図作成調査会 | 1988 | 『千葉県銚子市埋蔵文化財分布地図』 銚子市教育委員会 |
| 65. 神尾明正・遠藤 豊・
吉岡清司 | 1985 | 『千葉県海上郡海上町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 海上町教育委員会 |
| 66. 飯岡町教育委員会 | 1985 | 『千葉県海上郡飯岡町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図』 |
| 67. 八匠教育委員会 | 1980 | 『千葉県八日市場市埋蔵文化財分布地図－史跡・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図－』〔光・野栄町を含む〕 |
| 68. 光町教育委員会 | 1986 | 『千葉県光町埋蔵文化財分布地図－史跡・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 69. 芝山町教育委員会 | 1982 | 『芝山町の遺跡－芝山町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』 |
| 70. 横芝町教育委員会 | 1986 | 『千葉県山武郡横芝町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 71. 松尾町教育委員会 | 1986 | 『千葉県山武郡松尾町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 72. 成東町教育委員会 | 1986 | 『千葉県山武郡成東町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 73. 山武考古学研究会 | 1979 | 『千葉県山武郡山武町埋蔵文化財分布調査－第三次成東川境川流域の包蔵地－』 |
| 74. 東金市教育委員会 | 1979 | 『千葉県東金市埋蔵文化財分布地図』 |
| 75. 大網白里町教育委員会 | 1981 | 『千葉県大網白里町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 76. 長柄町教育委員会 | 1987 | 『千葉県長生郡長柄町埋蔵文化財分布地図－埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 77. 睦沢町教育委員会 | 1987 | 『千葉県長生郡睦沢町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 78. 長南町教育委員会 | 1987 | 『千葉県長南町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 |
| 79. 立教大学考古学研究会 | 1986 | 『千葉県岬町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』
夷隅郡教育委員会 |
| 80. ————— | 1987 | 『千葉県夷隅町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 夷隅郡教育委員会 |
| 81. ————— | 1988 | 『千葉県夷隅郡大原町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図－』 夷隅郡教育委員会 |

82. 鴨川市教育委員会 1988 『千葉県鴨川市埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地
図－』
83. 朝夷地区教育委員会 1979 『千倉町埋蔵文化財分布調査報告書』
84. ————— 1980 『千葉県安房郡丸山町埋蔵文化財分布地図 I』
85. ————— 1982a 『千葉県白浜町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地
図－』
86. ————— 1982b 『千葉県和田町埋蔵文化財分布地図－史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地
図－』
87. 館山市教育委員会 1988 『千葉県館山市埋蔵文化財分布地図』
- IV その他
88. 財団法人千葉県文化財センター 1991 「III. 調査報告 市原条里制遺跡（実信地区）」『千葉県文化財センター
センター 年報』No.16－平成2年度－
89. 設楽博己編 1987 千葉県松戸市殿平賀向山遺跡 松戸市遺跡調査会
90. 千葉県教育会 (1942・43?) 『千葉県通史』第1編（謄写）
91. 土屋潤一郎 1994 「桜井平遺跡」『平成5年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉
県文化財法人連絡協議会
92. 文化庁 1970 『文化財保護の現状と問題』大蔵省印刷局
93. 前田潮・川名広文 1984 『千葉県松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書』一の谷遺跡調査会
94. 矢戸三男・大村裕 1976 『遺跡分布調査報告I－千葉県香取郡・大須賀川流域及びその周辺』
95. 立教大学考古学研究会 1974 『千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料編）』

(筑波大学歴史人類学系)